Part 13

拝啓 日本の皆様へ
ワシントンから今、伝えたいこと

激変する世界情勢の中、米国が日本に期待する役割は大きくなっている。
イコールパートナーとしての関係を維持・強化するために必要なこととは。

文・秋元諭宏
Satohiro Akimoto
米国笹川平和財団会長兼理事長

慶應義塾大学法学部卒業。米ハーバード大学大学院東アジア学修士・社会学博士。米国三菱商事上級副社長兼ワシントン事務所長、三菱商事理事・グローバル渉外部長などを歴任。2019年1月に米国笹川平和財団の理事長に就任、同年10月より現職。

WEDGE

米国の駐日大使を務めたハーバード大学のエドウィン・ライシャワー教授は、世界史において日本が誇るべきことは、非白人、非ユダヤ・キリスト教徒、非インド・ヨーロッパ語族として、初めて近代化を実現し、その普遍性を証明したことだと論じた。帝国主義の時代、日本の指導者と国民が弱肉強食の世界に直面して、主権と独立を確保し、世界に冠たる国家を建設するという全国民的目標を掲げ、殖産興業と富国強兵の政策を推進した結果に他ならない。

翻って日本の現状を見ると、ライシャワー教授が評価した日本の近代化は、一時期のあだ花に過ぎなかったのだろうか。同教授の後を継いだハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル教授は2020年12月に亡くなるまで、日本の課題を指摘する一方で、「G7（主要7カ国）の中でグローバル化の負の側面に最もうまく対処している」と日本を評価していた。

その理由として、欧米先進国に比較して国内の経済的格差が限定的なこと、国内の制度、秩序、法治が守られていること、国民の一体感が維持され犯罪が少ないことなどを挙げた。

日本は近代化に伴って発達する自我と、伝統的な社会集団の関係においても、比較的均衡がとれた状況を維持してきた。日本以外のG7諸国では、時として若者、低所得者層、社会的少数派による不満が爆発し、暴動や略奪が発生するが、日本ではこうした事態はあまり見られない。日本を訪問する米国の国会議員やビジネスパーソン、観光客は、自国とは比較にならない清潔さ、公共交通機関の効率性と乗客の行動秩序、エレベーターを降りる際に開閉ボタンを押す他人への配慮、新型コロナ禍で飲食店が用意したマスクケースなどを挙げ、日本国民が共有する他人への「配慮」や「優しさ」を評価している。

ただし、単なる「日本はすごい！」という自画自賛は「日本は終わった！」という悲観論と同様に、日本の現実を

見誤る。そればかりか、事実無根の自信や傲慢に直結し、国を危うくする。

米国に見られるある変化

日米の人的交流は必須

今年4月の岸田文雄首相の上下両院合同会議演説への反応が示したように、米国は激変する世界情勢と自国の実力・影響力の変化を踏まえて、日本をグローバルなイコールパートナーとして意識するようになった。これは1853年のペリー艦隊の来訪、1945年のダグラス・マッカーサー連合国軍最高司令官の厚木飛行場進駐と同様に、日米関係史における重要な出来事だ。日本にとっては、将来を見据えた国の「かたち」を見直す重大かつ絶好の機会が到来していることを意味する。換言すれば、日米関係史で初めて米国のパートナーとしての「抜本的な国家観の再構築」が迫られている。

日本がやるべきことは多い。人的交流の改善・強化は急務である。まず取り組むべきは、次世代の米国との関係を担う留学生の大幅な減少の反転だ。2000年前後まで4・5万人以上いた米国への留学生は04年から減少を続け、22年には1・6万人に縮小した。学費高騰やTOEFLの内容変化などもあるが、日米文化教育交流会議（CULCON）が長年議論しても改善の兆しが見られない深刻な問題である。

国会議員の交流も活発化させる必要がある。日本のバブル崩壊後、米議員の関心は、躍進する中国へ移り、1967年から94年まで開催された下田会議などを通じて築かれたような、重鎮議員間の信頼関係は薄くなっている。駐日大使を務めたウィリアム・ハガティ上院議員など日本に関心を寄せる議員が、晩年のダニエル・イノウエ上院議員が担ったような役割を果たせるように支援することも必要だろう。

財界人の交流活性化も望まれる。近年、日本企業の指導者が自社事業の枠を超える世界的な議論をすることが少なくなり、日米財界人会議は変容し、大局を踏まえた日米間のビジネスリーダーの関係も希薄化している。半導体など、最先端技術の日米間連携の動きは、両国のビジネスリーダーが貿易・投資政策を含む戦略的関係を構築する機会として最大限発展させるべきだ。

米国における日本および日米関係の専門家の養成・支援も、喫緊の課題である。米国の日本への経済的興味・関心が薄れたこと、米国の大学において地域学が軽視されていることなどから、日本の専門家の育成は遅れ、教員と科目が激減している。日本の外交と安全保障を専門とするインディアナ大学のアダム・リフ准教授によれば、トップ100大学の8割以上の大学が、現代日本の外交や日米関係に関する科目を一つも開講していない。このままでは次代を担う米国人との間で日本と日米関係の理解が進まず、日本がイコールパートナーの役割を果たそうとしても相手として機能する米国人が不足する事態も懸念される。

最後に第4次産業革命をもたらした最先端技術の開発を中心に、世界的に各国間の競争が激化している現実も直視する必要がある。国際社会は産業、軍事、技術、人材、文化などにおける各国間の競争関係が前提だ。筆者は欧州の国際会議に参加しながら本稿を執筆しているが、世界各国の出席者の発言から、気候変動、公衆衛生、国際規範などのグローバルな課題に対する協調を訴える一方で、自国の競争優位をいかに確保するかに腐心している様子が手に取るように伝わってくる。

米国では近年、社会が大きく「自我

優先」に傾斜している。1970年代初頭から顕在化したリベラル派と保守派の価値闘争が激化し、社会が揺らいでいる。また、党派を問わない少数のエリートが政治権力と経済利益を独占する傾向も強まった。結果として、内政・外交問わずあらゆる政策に国民的合意が得られないほど、分断と対立が先鋭化している。

こうした傾向はSNSを通じて専門知識や事実に基づかない言説がインフルエンサー、セレブリティーを通じて増幅されることで深刻化する一方だ。

さらに、「個人の自由と権利」を社会や国家を上回る最重要事項として意識する風潮が強まったことから、人工妊娠中絶、性の多様性、移民・難民問題など、特定個人が最優先課題と意識する「シングル・イシュー」が幅を利かせている。こうした変化は政治にも反映され、民主党では極左、共和党では極右の発言力が増し、両党共に中道的な良識派が影響力を失ってしまった。結果として、大統領が代わるごとに内政・外交ともに指針や政策が大きく振幅する傾向が生じている。仮に今年11月の大統領選でトランプ前大統領が勝利すれば、内政・外交政策が再び劇的に変化することは確実だ。

WEDGE

日米関係強化には、日本側の努力も欠かせない

イコールパートナーの関係をどのように継続・強化するか？

こうした米国の変貌は、米国の同盟国と友好国に不測の対応を迫る状況を創出しており、米国の国際的な信頼性をも揺るがす事態を招いている。ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授は米国の「文化や価値における魅力」を軍事力や経済力と並ぶ「ソフト・パワー」として重視したが、今や米国の国際社会における「ソフト・パワー」そのものにも陰りが見える。日本はこうした変容する米国に対してどう向き合い、グローバルなイコールパートナーとしての役割を果たすべきかを真剣に考える必要がある。

その際には、米国社会は何事においても個人の自由裁量の余地が大きく、年間約100万人の移民が新しい労働力として流入し、国民の1割以上が移民であるという国際社会で「例外的な国」であるという事実も忘れてはならないだろう。

日本における米国から直接輸入されたような自我最優先の社会改革を求める一部の動きを見ていると、日本人は日本を米国のような社会にしたいのか、またそれは可能なのか、さらにそれは多くの国民にとって望ましいことかなど、真剣に議論し、国家の将来像を定める状況であると感じる。

日本が有する最大の資源は、教育程度が総じて高く、他者と協調して活動できる優れた人材である。最近は一流大学のトップクラスの学生の理想の将来像は、官僚や大企業ではなく、起業家や多国籍企業に変化した。しかし、日本の将来は優秀な人材の存在が大前提であることに変わりはない。

米国と日本のイコールパートナー関係は必然でも、恒久でもない。グローバルなイコールパートナー関係の維持と強化には、時として米国の耳が痛い提言を含む、同盟の維持・強化への不断の努力が欠かせない。外交と安全保障においては、日米が真摯に意見交換・調整できる信頼関係を構築することが、両国の将来にとって健全かつ有益であることは論を俟たない。

ヴォーゲル教授が指摘するように、日本は多くの日本人にとって自由で住み心地がよい国である。しかし、そうした国が日本人に永遠に保証されているわけではない。人口動態が示すように日本の国力は中長期的に低下することが必至な状況だ。日本国民には先人たちが構築した自由で住み心地がよい国を引き継ぎ、「個人」の利益と幸福を最大限に求めることに加えて、国際競争で勝ち抜きながら同時に国際社会に貢献する日本の将来像の構築に期待したい。

そして、日本が民主主義、自由、法治の概念を確実に意識し、一人ひとりの国民の生活を物心両面で充実させ、国際的な役割を果たすビッグビジョンを構築することで、米国のイコールパートナーとして、日本の役割も名実ともに確固たるものになるだろう。W